

高大・大社接続を目指した 言語スキル教育の取り組み —初年次「言語技術Ⅰ・Ⅱ」を中心に—

近藤 裕子

1. はじめに

初年次教育の一つとして、レポート・論文の書き方を指導している大学は増加傾向にある。平成30年度の文部科学省の調査によれば、調査対象782大学において679校(91.8%)がレポート・論文の書き方などの文章作法を身につけるための取り組みを行っているという。レポートや論文を書いた経験の乏しい初年次生に対し、大学で求められるレポートや卒業論文が書けるように指導することが求められていると言えよう。しかし一方で、初年次ライティング教育で学んだレポートの書き方が専門分野のレポートスタイルや各科目の課題の求めるレポートの型に応じていないという指摘もあり、特に、学部混成クラスでの専門科目への接続を見据えた指導は難しいとされている。そうした課題のある中、大学におけるライティング教育は何を目指すべきなのか。井下(2008)は、大学における文章表現教育は「学生自らが主体的に書くこと考えることによって、学びをメタ的に俯瞰し、自分にとって意味ある知識として再構築することができる」ものとしている。つまり、レポートを書き上げるためのプロセスにおいて学生自らが考え、書いた経験から得た知識を活かし、将来目的に応じた文章を書くことのできる力を養うことを目指す必要がある。そのためには、単なるライティングスキル習得に偏らない、思考や書くためのプロセスを重視した授業デザインが必要だと言えよう。

本稿では、大学における初年次ライティング教育の意義を再考しつつ、山梨学院大学の言語スキル教育、特に初年次生を対象とした「言語技術Ⅰ・Ⅱ」の取り組みについて報告を行う。

2. 山梨学院大学における言語スキル教育

山梨学院大学における言語スキル教育は、「大学での学び、および、実社会で自立して生きていくために必要な日本語運用能力を身につけ、高めていく」ことを目標として掲げている。具体的には、「議論する技術(話す・聴く)」、「読解する技術(読む)」、「文章を書く技術(書く)」等の4技能に加え、「論理的・批判的に思考する技術(考える)」を重視した総合的な言語スキル習得を目指し、レポートや論文の書き方だけでなく、生きていくために必要な言語スキルそのものを身につけるようにしている。そして、高大接続の観点から初年次生の大学入学以前に書いた文章経験を考慮し、何ができて何ができないかといった“レディネス”を踏まえたうえで必要な学びを設計している。

2.1 言語スキル系科目の概要

上記の目標を掲げ、現在山梨学院大学における言語スキル系科目は大きく以下の3つに分けられる。

①「言語技術Ⅰ」(前期)、「言語技術Ⅱ」(後

期)

総合基礎教育科目（法学部・経営学部 初年次履修指定科目）

- ②「アクティブ・リーディングⅠ・Ⅱ・Ⅲ」
「アクティブ・ライティングⅠ・Ⅱ・Ⅲ」
総合基礎教育科目（選択科目）※2023年度よりⅠ・Ⅱ・Ⅲ→A・B・Cに名称変更
- ③高大連携プログラム「アクティブ・ライティング入門」
（系列校で本学に進学する高校3年生を対象として、後期のみ開講）

①「言語技術」は、2021年度より経営学部、2022年度より法学部と段階的に導入された。総合基礎教育科目の中の履修指定科目として設置され、初年次生を対象に、入学時にクラスが指定されている。1年次前期に「言語技術Ⅰ」（90分×15回）、後期に「言語技術Ⅱ」（90分×15回）が開講されており、1クラス約30名で編成されたクラスは、2022年度は経営学部9クラス、法学部12クラス、計21クラスで展開された。授業は、クラスを小さな社会と見立て、学生同士の対話をとおし、学生自身が主体的に気づきを促すアクティブラーニング型授業を実践している。前期「言語技術Ⅰ」では、調査報告型レポート作成をゴール設定し、そのプロセスでアカデミックスキルを身につけていく。一方、後期「言語技術Ⅱ」では、“言語化”をキーワードとして、写真などの視覚情報、講演内容、自らの体験などを客観的に言語化することを目指している。

②「アクティブ・リーディングⅠ・Ⅱ・Ⅲ」「アクティブ・ライティングⅠ・Ⅱ・Ⅲ」は選択科目であり、「言語技術Ⅰ・Ⅱ」の上位科目として、学部や学年の縛りなく開講されている。書くことが苦手、あるいは、もう少し難しいことにも挑戦したいといった学生の必要や関心に応じたものとなっている。内容は、「ブッ

クレポート」や「論証型レポート」などの異なるタイプのレポート作成、自らの体験を社会課題と結び付けた「体験の言語化」、溢れる情報を精査し、データの把握・分析を行う「ファクトフルネス」、大学内外で観察したことやインタビューの内容をまとめ考察を加える「フィールドアプローチ・ライティング」などである。いずれも書くプロセスを重視し、アクティブラーニング型授業で展開されている。

③高大連携プログラム「アクティブ・ライティング入門」は、本学に進学することが決まった系列校の高校3年生を対象として、後期のみ開講される授業である。「問い」と「対話」の大切さを体験し、そのうえでさまざまな文章を題材に、分析し批判的に読む（クリティカル・リーディング）、相手に伝わる論理的な文章を書くなどの練習をする。高校と大学の学びをスムーズに接続させることを目的としている。

3. 初年次生を対象とした「言語技術Ⅰ・Ⅱ」の実践

つぎに初年次生を対象とした「言語技術Ⅰ・Ⅱ」について実践と学生の振り返りを報告する。

これらの授業は、高大接続を意識し、大学入学以前に書いた経験のある文章についてのアンケート調査と大学入学時に書いた文章（プレ課題）の分析結果をもとにデザインされている。調査結果から、大学入学以前に「自分の経験や感想」「授業の感想」は約8割の学生が書いた経験があると回答し、一方で、授業内容や資料を「要約する（まとめる）」経験は半数を下回っていることが分かった。また、「調べた情報を根拠に意見を述べる」経験は乏しく、4割に満たないことが明らかになった。さらに、字数については400～800字を書いた経験が最も

Q. 高校で以下の文章を書いた経験はありますか。 当てはまるものをすべて選択してください（複数回答可）。 有効回答数…468		
自分のしたこと（経験や感想）について書く（例）「文化祭を終えて」	369	(78.8%)
自分の感じていることや思っていることについて書く（例）「私の宝物」	223	(47.6%)
本を読んで感想を書く（例）「『○○』を読んで」	272	(58.1%)
何かのテーマに基づいて自分の意見を書く（例）「小学生にスマホは必要か」	254	(54.3%)
授業の感想・コメントを書く	250	(74.8%)
授業内容をまとめる	274	(58.5%)
授業で配布された資料を読んで、内容をまとめる（要約）（例）「本の内容紹介」	201	(42.9%)
新聞やインターネットの情報を自分で調べて、わかったことを書く	217	(46.4%)
新聞やインターネットの情報を根拠として、自分の意見を書く	170	(36.3%)
大学入試にかかわる小論文を書く	250	(53.4%)
授業の内容にかかわる小論文を書く	116	(24.8%)
志望理由書を書く	366	(78.2%)
文章を書いたことはない	3	(0.6%)

図1 文章を書いた経験についてのアンケート（2022年経営学部法学部初年次生）

多く、1200字を超える文章はほとんどの学生が未経験であるということであった。

また、プレ課題の内容は、資料を読み、その内容を400字程度で説明するものであったが、その記述は主観的な思考や記述が多く確認された。例えば、資料をまとめる際に「私はこの資料を読み、…を初めて知った」「私が高校生だった頃も……」など、資料の内容よりも自分の行動に軸を置いた内容・表現で書かれた文章が散見された。これらは、これまで書いた経験のある作文や感想文などの自分を軸にして記述する文章タイプの影響だと推察できよう。

以上のことから、初年次生にとって、まずは自分に軸を置いて書くことからの脱却するために、物事を観察し、客観的記述することが必要だと考えられる。これらを踏まえ、前期では大学での学びの基礎となるレポート・ライティング（調査報告型レポート）を、後期では、社会接続を意識し、言語化の際に客観的に記述することへの意識づけを重視する学習デザインとした。

3.1 「言語技術Ⅰ」（前期）

「言語技術Ⅰ」はつぎのように進めた。

第1回で授業の進め方を説明したのち、アイズブレイクを行い、新入生の緊張をほぐしていく。第2、3回で「アカデミック・スキルズ」のインプットを行う。ここでは、ディスカッションの意義・方法を知り、グループワークやピア活動の準備を行う。同時に、メールの書き方、ノートの取り方を実践する。特に、ノートテイクについては、教師に促され黒板を写すだけのものではなく、主体的に自分の理解や学びに即した工夫や努力が求められることを確認する。第4回～6回は、「説明する」ために必要なスキルを学ぶ。パラグラフ・ライティングを例示し、構成や説明の順序、抽象と具体などを意識し、さらに、客観的・主観的な文章の特徴を知る。第7回からは、いよいよレポートについて取り上げる。まず、文章は目的に応じて書き方が異なるということ、そして、レポートには、分野・課題によってさまざまなタイプがあり、自分が求められているレポート課題に応えるために、どのレポートのタイプで書くべきかを見極めることが大切であることを強調する。そして、課題である調査報告型レポートのサンプルレポートを読み、構成・論展開・表現等の技法を確認する。第8回では問いを立てる練習

を行った後に、関心のあるテーマごとにチームを作り、レポートにつながるような問いを立てる練習を行う。第9～11回では、自分の立てた問いに答えるための資料検索方法を学び、資料を収集する。また、外部資料を用いた文章作成方法（引用の仕方・出典の書き方）やルールなどを学ぶ。剽窃やコピペなどがなぜ許されないのか、また意図しないコピペの例を提示し、注意を促す。第12、13回では、アウトライン作成を行う。論展開を検討し、説得力のあるエビデンスを準備する。ピア・レビューを繰り返すし、相手に伝わるか、相手をなるほどと納得させられるか、納得させるにはどうしたらよいかを確かめながら修正を繰り返す。第14回では提出したレポートを学生同志のピア・レビューによって問題点を見つける。そして、リライトを行う。ここでは、相手にとって有益な指摘ができるよう各自が真剣に相手のレポートを読む。それと同時に、指摘するためレポートの要点を各自が学ばなければならない。

以上が全体の流れである。単なるライティングスキルの習得ではなく、レポートを作成するプロセス一つひとつをとおして、問題発見をし、調査・対話・思考する体験を重視しながら、それを分かりやすく、また説得力をもって他者に伝えるための論の組み立てや表現などの習得を目指す。同時に、ピア・レビューを繰り返すことで「読み手」を意識した文章作成の体験をする。小山（2020）は「(大学) レポート学習行動」は「(仕事) 経験学習」と有意な正の関連にあり、大学時代のレポートにおける「思考を鍛える」経験（行動）は職場の経験学習に一定程度転移するとしながらも、一方でレポートの書き方を受動的に教わっただけでは、仕事には活かされないという指摘をしている。ここからも学生の主体的な学びを促す授業デザインである必要があると言える。そして、「言語技術Ⅰ」はそれに適うような授業運営を目指

し、実践している。

第1回	授業オリエンテーション
第2回	授業の目標・進め方／自己紹介 アカデミック・スキルズを磨く（1） ディスカッションの方法／メールの書き方
第3回	アカデミック・スキルズを磨く（2） ノートテイキング／資料のまとめ方
第4回	説明する（1） 客観的記述／パラグラフ・ライティング
第5回	説明する（2） 事実から考察へ／説明文作成
第6回	説明する（3） 説明文フィードバック／リライト
第7回	文章の型・構成を知る レポートについて 調査報告型レポートの構成 ／サンプルレポートの分析
第8回	問いを立てる 多角的に物事をとらえる
第9回	資料を探す 検索方法／資料整理
第10回	資料を扱う（1） 資料収集と引用
第11回	資料を扱う（2） 資料活用と引用
第12回	アウトラインを作成する（1） 構成の練り上げ
第13回	アウトラインを作成する（2） ピア・レビュー／リライト
第14回	レポートを推敲する レポート仮提出／ピア・レビュー／リライト
第15回	前期授業を振り返る

図2 2022「言語技術Ⅰ」シラバス

3.2 「言語技術Ⅱ」（後期）

後期の「言語技術Ⅱ」について詳細を述べる。「言語技術Ⅱ」は、大学生活や実社会でも書くことが想定されるレポート以外の文章作成に対応できる力を身につけることを目指し、“言語化”をキーワードとして事実や自分の考えをわかりやすく他者に伝えるスキルを養うものである。大学生活では、レポート以外にも次のような文章を書くことが想定される。授業の

振り返りでリフレクションシート、PBL型授業・インターンシップなどでの企画書や報告書、各種実習での実習記録やメール文といった文章、そして、奨学金等の申請書、就職活動に向けたエントリーシート、自己PR文、小論文などである。これらの書き方の異なる文章においても共通して求められるのは、相手に伝わるという点である。そこで必要となる共通した言語スキル、例えば、「構成、説明の順序、客観的記述、説得性」などに着目し、それらを書くプロセスにおいて意識づけを行うことで、どのような文章作成の際にもそのスキルを意識して書くことにつなげられる。また、実社会で求められる書くということについて石黒(2020)は、「よいビジネス文書の条件の一つに「わかりやすさ」があり、「わかりやすさ」とは、その難解な表現、主観的な表現、漠然とした表現がない」ことだと指摘している。この点からも「言語技術Ⅱ」での学びは、実社会においても活かされると考えられる。

「言語技術Ⅱ」は以下のように進めた。

第2～5回は「視覚情報を言語化する」取り組みを行う。「写真ワーク」はまず練習として1枚の写真を取り上げ、①視覚情報(写真)を客観的に説明し、②そこから何が読み取れるかといった「解釈」を記述する。③(①②を踏まえ)自分とのかかわりを記述する。④プレゼンテーションや文章化をとおしてクラスメートと共有を行う。このワークでは、学生にとって①の視覚情報を客観的に記述することが難しいというコメントが多く寄せられた。どうしても自分に軸を置き、「この写真を見て私は…」「…を思い出した」といった記述に向かってしまうという。写真(物事)を観察し、説明するトレーニングは、客観的記述を意識させることを促す。第6、7回は「情報をまとめる」練習として、TEDトークを視聴し、内容をまとめる。時系列ですべての内容を記そうとする学生も多

く、情報のポイントをつかむことと、パラグラフ・ライティングでその内容をまとめる練習を行った。第8～10回は「体験を言語化する」取り組みを行う。これまでを振り返り、「自分が成長した(変化した)と感じた点は何か、それまでの自分はどんな様子だったか、それがどう変わったか、何がきっかけか、これからの人生にどう影響するか(させたいか)」などを具体的に整理し、ディスカッションを行う。その後プレゼンテーションを行い、最終的に文章化する。ピア・レビューで構成、わかりやすさなどをチェックし、内容について相互にコメントを行う。伝えたいことを最初に話す・書くなど構成を意識し、具体的に説明することを意識したワークとなった。第12～14回は「小論文を作成する」では、資料を読解し、トピックについて自分の立場を決め、根拠を示しながら自分の主張を述べる。これまでの学びの総まとめとなるものである。

第1回	授業オリエンテーション/前期レポートのフィードバック
第2回	視覚情報の言語化～写真説明ワーク(1)
第3回	視覚情報の言語化～写真説明ワーク(2)
第4回	視覚情報の言語化～写真説明ワーク(3)
第5回	視覚情報の言語化～◎合同授業・作品の共有
第6回	体験の言語化～動画視聴とメモ取り
第7回	体験の言語化～会話・報告を原稿にまとめる
第8回	体験の言語化～「○○○の体験」をまとめる
第9回	体験の言語化～「自分プレゼンテーション」報告
第10回	体験の言語化～◎合同授業・自分プレゼンの共有
第11回	小論文作成～意見文とは何か
第12回	小論文作成～意見をまとめる
第13回	小論文作成～アウトライン作成
第14回	小論文ドラフト提出 ピアレビュー
第15回	小論文提出 まとめ・振り返り

図3 2022「言語技術Ⅱ」シラバス

3.3 学生の声

以上の取り組みをとおして、学生はどのように学びを実感しているのか。学年末に行ったアンケート（有効回答数136）では、93%の学生が「レポートの構成」、続いて78%の学生が「引用の方法」だと回答した。また、記述式の質問で、「「言語技術Ⅰ・Ⅱ」の授業がほかの授業や場面で役立ったと思うことはありますか？あれば、それはどんなことか具体的に教えてください」という質問に対しては、「他の授業でのレポートやプレゼンテーションに役立った」という内容の回答が82%であった。具体的には、「レポートを書くとき、構成やパラグラフを意識して書けるようになった」「レポートの書き方をしっかり学ぶことができたので、他の授業でレポートを書く時にスッキリとした文を書くことができた。また、ディスカッションをたくさんしたので、話の進め方や話し方が身につについて、他の授業でのグループワークもスムーズに進んだ」「英語の授業で批判思考のスピーキングテストをする時にとても良いと言われた。言語技術で構成を学んだからだと思う」「基礎演習科目でのプロジェクト発表、データサイエンス科目のプレゼンテーション、法と政治入門科目などのレポート課題作成に役立った」「憲法の授業でのレポート課題では、構成や引用の仕方など、言語技術で学んだことを活かせた」などが挙げられ、他の科目の課題でも活かすことができているという意識が確認できた。

さらに、「コミュニケーションやグループワークでの効果」に関しても、「ほかの授業で自分や他の人の意見に対してフィードバックを行うときに、具体的に説得力のある話ができ、役立ったと感じた」や「最初はグループワークの際に初対面の人と自分から話すのが苦手だったが今では自分からでも普通に話せるようになり、他の授業でとても役に立った」など、対話

を重視した授業の効果にも言及があった。

そのほか、メールの書き方、ノートやメモの取り方などの記述が確認できた。

以上のことから、学生は言語技術で学び、身につけたスキルをほかの科目の課題などにも活かすために知識を再構築させようとしていると言える。これは、授業が単に「調査報告型レポート」作成を目指したのではなく、作成に向けてのプロセスを通じて一つひとつスキルを習得し、また、構成の大切さをレポート以外の文章や発表でも繰り返し体験したからだと考えられる。

3.4 ライティング支援

上述の言語スキル系科目の正課外のサポートとして、「ライティングサポートデスク」がある。2022年度は、月～金曜日の2～4限（昼休み含む）に開室しており、個別相談の希望者や授業欠席者に対して、学生サポーターと言語スキル部門の教員がサポートにあたった。

また、「言語技術Ⅰ・Ⅱ」21クラスの一部（2022年度は5クラス）にSA（スチューデント・アシスタント）を配置し、授業内でグループワークの促進や、プレゼンテーションやスピーチのモデルを行うなど授業の活性化に貢献した。さらに、学生サポーターやSA自身の成長を促すために言語スキル部門の教員による研修も実施した。2023年度は、SAを「言語技術Ⅰ・Ⅱ」全クラスに採用する予定である。詳細は別稿に譲る。

4. まとめと今後の課題

以上、山梨学院大学における言語スキル系科目と「言語技術Ⅰ・Ⅱ」の取り組み及び学生の声について報告した。

「言語技術」は文章を書くプロセスをとおして、物事を観察し、対話し、思考する体験に重

きを置き、さらに、論を組み立て、わかりやすく伝えることを目指している。これらの力は、レポートを書く、プレゼンテーションする、ディスカッションするといったどの場面でも共通したスキルだと言えよう。そして、大学だけではなく実社会においてもたくましく生きていく力として活かされるであろう。

「言語技術 I・II」の今後の課題として、授業内容の検討をさらに行っていくことが挙げられる。それと同時に、バックグラウンドの異なる複数の教員が同じ授業を担当するため、教育の質保証といった面からもゴールや指導方法の共有はもちろん、評価についても細かな点を調整し共有する必要があると言えよう。

参考文献

- 石黒圭 (2020) 「第 4 章 よい発注書の言語的条
件」『ビジネス文書の応用言語学的研究』
pp.59-60. ひつじ書房
- 井下千以子 (2008) 『大学における書く力考える

力：認知心理学の知見をもとに』東信堂

春日美穂・近藤裕子・坂尻彰宏・島田康行・根
来麻子・堀一成・由井恭子・渡辺哲司
(2021) 『あらためて、ライティングの高大
接続—多様化する新入生、応じる大学教師』
ひつじ書房

木下是雄 (2009) 『日本語の思考法』 pp.84-86.
中央公論新社 (文庫)

小山治 (2020) 「大学時代のレポートライティン
グ経験は仕事においてどの程度役立つか：
社会科学分野と工学分野の比較」大学教育
学会 2020 年度課題研究集会

近藤裕子・井本美穂・佐藤壮広 (2021) 「社会接
続型ライティング教育に向けて」日本リメ
ディアル教育学会第 16 回大会予稿集

三森ゆりか (2013) 『大学生・社会人のための言
語技術トレーニング』(大修館)

文部科学省高等教育局「平成 30 年度の大学にお
ける教育内容等の改革状況について」令和
2 年 10 月 5 日